

事業活動報告 NO.2

人口70億人時代の情報ネット社会を 創造するためのフォーラム

情報ネットがあらゆる分野に影響を与える存在となっていることから、その重要性和問題性について、知見を共有し、これからネット社会とどのように向き合っていくべきかを考えることは、高校生、大学生にとって極めて重要となってきた。

このため本協会では、情報ネット社会の中で未来を切り拓いていく若者にネット社会とどのように向き合っていくべきか、視座を提供し理解を深めることを目的に、有識者による「人口70億人時代の情報ネット社会を創造するためのフォーラム」を開催し、インターネットを通じて公開することとした。

平成24年度は、「情報ネット社会の期待と課題」

と題して平成25年1月29日に7人の有識者から情報ネットの進展に伴い、どのような社会現象が起きているのかを解説し、今後情報ネットを適切に利用していく上で理解しておくべき視点について有識者間の議論を通じて、若者に気づきと意欲を与えることを目的に以下のテーマで開催した。

フォーラムの内容は編集した上で、平成25年6月にYouTubeに公開するとともに、私立大学・短期大学の学長、日本私立中学高等学校連合会、都道府県教育委員会等の関係機関に案内し、学生、生徒、関係教職員に紹介いただくとともに、授業での教材の一部として活用いただけるよう案内している。

情報ネット社会の期待と課題（有識者とテーマ）

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1) 情報ネット社会の仕組み | 村井 純氏（慶應義塾大学 環境情報学部長） |
| 2) 情報ネットビジネスを理解する | 夏野 剛氏（慶應義塾大学教授、株式会社ドワンゴ取締役） |
| 3) 未知に立ち向かう力を汲み出す情報ネット | 西垣 通氏（東京大学大学院 情報学環教授） |
| 4) 情報ネットによる新たな産業革命 | 大原 茂之氏（東海大学教授、株式会社ブテック代表取締役） |
| 5) ゲームがつかなくサイバー空間と現実空間 | 松原 健二氏（ジンガジャパン株式会社CEO） |
| 6) 語らいの中で成長する若者 | 今村 久美氏（NPO法人カタリバ 代表理事） |
| 7) 情報ネットを利用した教育改革を探る | 安西祐一郎氏（独立行政法人日本学術振興会 理事長） |
| 8) 若者はこれから何をすべきか | 有識者全員 [役職名は平成25年1月収録時点] |



テーマ別の収録概要

1) 情報ネット社会の仕組み

村井 純氏（慶應義塾大学 環境情報学部長）

世界人口70億の30%、日本では80%が情報ネットを利用するようになり、世界中の知見が共有され、情報を活用した問題発見や解決に大きな力を発揮している。これからの時代を担う若者は、情報社会の一員としての役割の重要性を認識して、イノベーションによる新しい夢の実現を図ることが期待されている。一方、情報ネット社会の歴史は浅く未整備な課題が多いことから、情報通信技術の新しい使い方を理解していくことが重要である。一人ひとりが日本の伝統と文化を踏まえ、情報ネットを通じて人々の幸せや平和を創出していくことができるようにして

いくのが情報社会の仕組みと考えている。

2) 情報ネットビジネスを理解する

夏野 剛氏

（慶應義塾教授、株式会社ドワンゴ取締役）

ネットビジネスを作ってきた立場から、情報ネットにより、この15年間で社会や経済の仕組みが画期的に変わったことを三つの側面から説明した。一つは「効率革命」であり、従来10人1ヵ月の業務が3人3日間で可能になったことや、チケットレスの予約・購入が居ながらにしてできることなどである。二つは「検索革命」であり、ネット上で世界中の情報が誰でも入手が可能になった。三つはツイッター

やフェイスブックに代表される「ソーシャル革命」であり、個人が世界中に情報を発信して意見が集められるようになり、従来の組織中心の考え方に依存するだけでなく、個人個人の判断が極めて重要になっている。若い世代の皆さんは、このような変化を認識し、自分の考える未来に確信を持って取り組むことと情報ネットを活用して外部から多くの意見を取り入れ新しい価値の創造に挑戦してほしい。

3) 未知に立ち向かう力を汲み出す情報ネットの運用 西垣 通氏(東京大学大学院 教授)

情報ネットが発展し、地球規模で仕事をすることが常態となる社会では、異質な文化や価値観を持つ人達との協調が求められる。そこでは専門だけに閉じこもることなく、柔軟で寛容な姿勢を持ち、デジタル情報のみでなく相手が何を考えているのかを理解する感情的な共感力を身につけて自分の魅力とアイデンティティを磨く必要がある。その上で、世界の知を集め、自分たちの新しい文化を創っていく「集合知」が求められる。情報ネットをそのためのツールとして上手に活用することが不可欠であり、地球規模と地域レベルの集合知を活用して社会を変革していく主役は若者である。なお、その際日本の伝統であるきめ細かな心遣いなどを上手に生かして表現に結び付ける努力が必要となる。

4) 情報ネットによる新たな産業革命

大原 茂之氏

(東海大学教授、株式会社ブテック代表取締役)

情報ネットにより、世界規模で新たな産業革命が起こっており、流通、交通、電力、製造などの産業が大きく変容している。例えば自動車業界では車1台に約100個のコンピュータが使われネットワークで制御され、安全や省エネを実現している。空港で飛行機の到着から貨物の仕訳、搬送に2日かかっていた作業を数時間で完了する情報システム等を紹介した上で、情報ネットによる新しい付加価値の創造には無限の可能性のあることを強調し、それを創り出す主役は若い世代である。そのためには一つの領域に閉じこもることなく、広い分野に関心を持ち、多面的な情報を取り入れて学ぶことが大切である。

5) ゲームがつなぐサイバー空間と現実空間

松原 健二氏(ジンガジャパン株式会社CEO)

ソーシャルゲームが中心になり、世界中からネットでゲームに参加できるようになった。このことで日常生活のデータがネット上に集積され、現実の生活とサイバー空間が繋がり、ユーザーとコンピュー

タを結びつけて分析することで新しい価値の創出が可能になり、他のサービスやビジネスにも展開されていくことが避けて通れない時代になってきている。若者はソーシャルゲームがもたらす変化を踏まえて、インターネットのサービスや技術を用いて将来どんな社会になっていくのかを考え、新しいモノづくりやサービスにチャレンジして欲しい。ゲーム依存症や悪質なサイト等の弊害については、相手の立場に立って情報を活用する適切な心得を身につけて欲しい。

6) 語らいの中で成長する若者

今村 久美氏(NPO法人カタリバ代表理事)

震災被災地の子供たちがインターネットを駆使して地域や世界へ情報を発信し、世界中から提案や意見を得ることで新しい知恵を創り出し、活動を展開している。一つの事例は、震災の記録を石碑から木碑にして数年に一度作り替えることを通じて定期的に地域の防災意識を高めるアイデアを発信し、対話する中で新しい考え方と出会い、地域への働きかけを行っている。もう一つの事例は、一方的な支援を受けるのみでなく、震災の経験を提供していくことが自分たちの役割であることに気づくことでグローバルに成長している。情報ネットを語らいのツールとして活用することで、問題意識を持って世界の人々との関わりの中で学んでいくことが大切である。

7) 情報ネットを利用した教育改革を探る

安西 祐一郎氏

(独立行政法人日本学術振興会 理事長)

米国のMOOC、カーンアカデミー、MITオープンコースウェアなどのオープン教育などを通じて、主体性と意欲さえあれば情報ネットにより世界中の学識者および仲間達と議論しながら学べる環境が開けている。世界で活躍するためには日本の文化・歴史を理解し、自分の生き方、アイデンティティを持ち、断片的でなく体系的な知識を身に付け、行動を通して知恵に変えていくことを生涯に亘って続けることが不可欠になる。大学で授業に満足することなく、世界を視野に入れ、世界の若者とネットを通じて議論するなど多面的な学びを展開していくことが極めて重要である。大学教育の質的転換には時間がかかると思うので高校生、大学生の皆さんは自分の人生を考え、自分のために情報ネットを活用して多様な学びをして欲しい。当然のことながらキャンパスでの学びや体験、経験積む学びも重要である。問題意識と意欲、主体性さえあればそれが可能であり、世界で活躍できる時代になっている。